

आयूस: あーゆす

〈発行〉 京都文教短期大学図書館／京都府宇治市槇島町千足80

「泥かぶら」を観て

教授・図書館長 照屋敏勝

新制作座の「泥かぶら」(真山美保作・演出)を観た。何年も前から観たいと思っていた。大変感動的であった。この作品は1952(昭和27)年の初演から今日に至るまで50年間も上演されており、一千万人以上の人が観ている。世界の演劇史上類例のない記録である。

むかし、ある村里に大変みにくい顔の女の子がいた。両親もなくひとりぼっちだった。あまりの醜さに人々のあざけりのまとなり、石を投げつけられたり、唾を吐きかけられたり、踏みつけられたりした。いつも着の身着のままであった。誰とも遊んでもらえなかった。女の子の本当の名を呼ぶ者は一人もいなかった。村の人たちや子ども達からは「泥かぶら」と呼ばれて、さげすまれていた。女の子の心は日一日とすさみ、荒れて、狂暴になっていった。「泥かぶら」が草花の中で寝ていると、村の子ども達が出来てきて、ののしり、石を投げつけ、「おまえなんかあっちいけ」と追っ払ってしまった。大人からも子どもからもけ者にされ、いじめられて、「泥かぶら」の居場所はどこにもなかった。

ある日、「泥かぶら」が草むらに伏して、やり場のない怒りと悲しみにもだえ苦しみ、「美しくなりたい」と泣き叫んでいると、そこへ通りかかった旅の老法師が声をかけてきた。そして「泥かぶら」に美しくなる秘訣として、次の三つのことを教えた。

- 自分の顔を恥じないこと
 - どんなときにも、にっこり笑うこと
 - 人のみになって思うこと
- この三つを守れば、村で一番美しい人になれる

と告げて法師は去っていった。「泥かぶら」の心は激しく揺れ動いた。

その日から「泥かぶら」の一途な努力が始まった。しかし、いくら努力しても村人のあざけりやののしりやいじめは消えなかった。美しくもならなかった。「泥かぶら」は失望し、落胆し、旅の老法師をののしったりした。それでも努力するしかなかった。

幾年かがすぎた。「泥かぶら」は村人にとって不可欠の存在になっていた。村人のために献身的に働いた。ある日、貧しさゆえに一人の少女が人買いに買われていく事件が起こった。「泥かぶら」は身寄りのない自分が身代わりになることを申し出た。そして村人やその少女の家族の止めるのもきかず、人買いに連れられて村を出ていった。人買いは凶悪な男であったが、「泥かぶら」は何のおそれや憎しみも持たずについていった。道中、何でも言うことをよくきいてよく働いた。「泥かぶら」の純粋な魂と行動に接して、人買いの心にも動揺が起こり、次第に良心がよみがえってきた。山中で野宿したとき、「泥かぶら」が山水をくみに行っている間に、人買いは森の木に書き置きを残して消えていった。

「ありがとう。仏のように美しい子…」

「泥かぶら」はその書き置きを読んで、旅の老法師が教えてくれた三つの教えの意味を初めて理解した。山中の月の光の中でしみじみと語る「泥かぶら」の顔が美しく輝いていた。

真の芸術は万人を同一の感情で結びつける性質を持っているが、「泥かぶら」はそのような芸術作品の一つである。

なつかしい本の記憶

教授 榎田 壽 恵

先日図書館へ行ったときのこと。目に飛び込んできた本の山。「あー懐かしい！」の一言につきる数々でした。世界文学全集、日本文学全集、世界思想全集などなど。丁度古い本の整理をしているところに行き合わせたのです。目にはいると同時に、頭の中は学生時代にそして十年程前の同窓会にもどってしまったのです。

「やあ、相変わらず読んでいる？」それが卒業以来久しぶりに会った友人の挨拶。それから延々と、いろいろな書籍についてお互いの過去から現在までをおしゃべりして、楽しいひとときをすごしたことなどを思い出していました。「今思い出すと楽しいけど、あの頃はシャクやったなあ。どの本を借りても、先に君の名前が書いてあって。たまには異ったジャンルの本（「赤毛のアン」やケストナーの一連のものやエレナー・ポーターのものなど）ならまさか読んでいないだろうと思って借りても、またまた君の名前。4年間のうちに競争心より仲間意識の方が強くなって、図書館で本を借りてカードの名前を確かめるのが楽しくなってるねえ…。」そのようなこととは露知らず、ほんとにただただ読むことに明け暮れた毎日。今思い出してもよく読んだものと走馬燈のようにタイトルが浮かんで消え、いろいろなことが思い出されます。そして今、一冊の本が当時のすべてを思い出すよすがとなることに気付いて、本を読むことにまた一つ楽しみが増えたような次第です。

その頃に読んだ本で特に心に残っているのは、ロマン・ローランの「魅せられたる魂」、マルタ

ン・デュガールの「チボー家の人々」、イワノビッチの「静かなドン」、娘の書いた「キューリー夫人伝」などで、その他トルストイやツルゲーネフ、マーガレット・ミッチェル、モーム、ヘミングウェイなどなど数え上げたら切りのないほど、ヒマを見つけては読書にあげくれた毎日でした。日本の古典や文学全集もいろいろと主な本をひもどいたが、心に残ったものは少なく辛うじて徒然草や方丈記のところどころぐらいで、樋口一葉、森鷗外や芥川龍之介のあたりはすぐに卒業し、嗜好にあった現代作家のものに移っていった記憶があります。そして何故かヘルマン・ヘッセと聞いたら堀辰雄の「風立ちぬ」、伊藤左千夫の「野菊の墓」というように連鎖反応が起きてまるでクイズのように面白い。またレポートのためだけでもないけれど、カントやボオボワールやマルクスやらと読んでも、今は何にも残っていない。それは不思議なくらいで、楽しんでなかった証拠です。兎に角目の前にある本を手当たり次第に乱読した学生時代を懐かしく思い出しましたが、最近では作家にも作風にも好みができて、手あたり次第とはいなくなりました。そのうえ読書にもそれ相応のエネルギーが要り、あまり大作は読めなくなっています。「若い時に大いに乱読すべし」です。そのうちに必ず心に残る本との出会いがあり、自ずと自分の嗜好に合ったスタイルができて、さらに読書は又楽しからずや！ということになるでしょう。私は今日も長い通勤電車を苦にせず好きな本を楽しんでいます。

私のすすめる3冊

専任講師 山田 智子

1 『深夜特急』 ————— 沢木耕太郎；新潮社
ユーラシア大陸をデリーからロンドンまで乗合いバスを乗り継いでどこまで行けるのか？ 25年前に、そんな酔狂な思いつきで旅をした青年がいた。ルポライターである彼の描写は鋭く、マカオでのサイコロ賭博に手に汗握り、インドでの喧騒と人間模様に人生観が変わる。マニュアル本に頼らない旅の仕方が気持ちいい。読み進むにつれて、旅行者である青年の心の成長が感じられる。私を青年海外協力隊へと導いてくれた本。あー、また旅に出たくなってきた。

2 『銀幕のインテリア』 ————— 渡辺武信；読売新聞社
最近、人間愛も恋愛もサスペンスもコメディもごちゃ混ぜになった映画が人気だ。私は、それに加えて、名作といわれる椅子や照明がさりげなく置かれ、小道具に気を配っている映画がお洒落だと思う。映画は、建築空間を人の動作やしぐさを伴って見ることができ、ライフスタイルとインテリアとの関係を明確にさせてくれる。映画評論家兼建築家でもある著者は、この本を「映画から住まい方を学ぶ」ためだけでなく、それによって映画に新たな楽しみを発見してほしいとしている。

3 『羊をめぐる冒険』 ————— 村上春樹；講談社
耳のモデルの彼女。〈僕〉の枕もとの電話。〈鼠〉の撮った1枚の写真。そして羊をめぐる冒険が始まった。次々に登場する不思議な人物。初秋の北海道の別荘で〈僕〉が見たものは？ ミステリー感覚で一気に読めてしまう小説。暗号のような文章と独特の乾いた文体がおもしろい。しかし、物語の底に流れるものは人間の本質に迫り、重くて哀しい。『風の歌を聴け』『1973年のピンボール』につづく3部作最後の青春小説。

仏さまの声 — 母と子(4歳児)の会話

おばあちゃんが仏壇にごはん、お水を供え、ろうそく、線香に火を付け、“チーン”というリンの音で我が家の一日が始まる。そんな毎日を見て育った、くいしん坊の裕貴。仏壇には御供物がある事に気付いたある日、“チーン”「ナムアミダブツ。仏様食べてもいいですか？」と聞いて御供物のお菓子を食べだした。

私 「裕貴、仏様に食べてもいいですかって聞いた？」

裕貴 「裕貴スイミングで今日は頑張ったから食べてもいいですよって言わはった。」

家族中「へー!!」

私 「仏様の声ってどんな声やった？」

裕貴 「僕にしか聞こえへん小さい声でいいですよって言ってくれはった。」

その後、おばあちゃんの仏壇に御供えされるお菓子は裕貴の好物にかわっていった。

…私も一度仏様の声を聞いて見たいものだ。…

『輝くことば』〈平成10年、御室幼稚園〉より

『モモ』を読んで

初等教育専攻2回生 谷口恵理

この本の表紙からも題名からも、どんな物語なのか想像するのは、とても難しいことですが、見出しの「時間どろぼうとぬすまれた時間を人間にとりかえてくれたふしぎな物語」という言葉により、興味を持ち読んでみたいという気にさせられました。書き出しは「むかしむかし…」で始まり、いく世紀も時が流れた時代から「モモ」の話が始まるようになっていて、この表現により不思議な気持ちを持った私の心はドキドキしていました。

小さな円形劇場の廃墟に奇妙な格好をした女の子が住み着きました。その女の子の名前が「モモ」というのです。浮浪児のモモを人々は最初から優しく接してくれました。なぜなら、貧しい人々のお互いの立場を苦に思うのではなく、その状況を受け入れて、その後自分がどう活動して、楽しく過ごして行くかによって幸せの大きさは、違ってくることを知っているからです。そういう人たちが住んでいる土地にモモは住むことができたと感じました。

この本を読んでいくうちに、私はモモはとても心の清らかな子どもだということを感じるようになり、逢ってみたいと思うようになりました。なぜなら、モモに話を聞いてもらうだけで、自分だけではどうしてよいのか解らずに迷っていた人は、急に自分の意志がはっきりしてきたり、悩みのある人は希望と明るさが湧いてくるというからです。相手の話をじっくりと聞くことによって、その人に自分を取り戻させる能力があるモモに私も話を聞いてもらいたいなあと強く願うようになりました。モモのあの黒くて大きな目で見られたときの様子を想像してしまうくらい私はモモに親近感を持ち始めました。モモの人柄にどんどん魅力を感じ、自然といつも隣に友達が居るモモがうらやましいと思いました。モモは人の“心”というものを

大切に思い、またそれを自然に感じられる感受性が豊かな女の子だと思います。

マイスター・ホラの力とモモの勇気により、時間どろぼうの灰色の男達に勝ち、街の人たちには自分たちの自由となる時間が戻りました。この勝利を知るまで、私もこの物語の登場人物のように、時間に追われたり、冷たい気持ち(考え)になりながら読んでいました。

私はこの本を読むまで、時間のことを真剣に考えたことはありませんでした。しかし、これほど時間は人間の生活に関わっているのに、なぜ今まで深く考えなかったのか、この物語りを読んで考えさせられました。『モモ』は時間というのをテーマに普段あまり考えないことを教えてくれました。人生の中で時間というのは自然に進んでいき、止めたり、戻ったりはできないのです。そして、時間を上手に使ったか、下手に使ったかは、自分自身で判断しながら刻んでいくのです。振り返ったときに何も残らない時間の使い方は意味のある使い方ではないので、好きなだけ時間を使い、それが自分を高める時間なら、それは最高の使い方だと思います。その最高を感じ取るために心があるのだと思います。心がそれを感じ取らないと、その時間は無駄だと知りました。

時間とは表現しにくいものですが、私たちが共に歩んでいる私たちの空間(居場所)と生活ではないかと思います。

めまぐるしく発展している現代社会の中で、流れに飲み込まれずにモモのように人の話に耳を傾け、待つことが人間にとってとても大切だということをおこの本は私に教えてくれました。

ミヒャエル・エンデ作『モモ』(岩波書店)

大島かおり訳